



# 写真

—2006年はいろいろなことがありましたね。  
 寿玉—そうでした。  
 —寿玉さんのことで印象に残っているのは、写真集です。寿玉さんご自身写真には、かなりこだわりがあるようにお見受けしますが。  
 寿玉—そう見えますか？ あるいは「寿玉さんは写真が好きじゃないんだよね」といわれたりします。確かに、自分が写っている写真を見ると、「写真」そのものを見ると、より、その中の「自分」に目が行ってしまっているので、「写真が好

き」というのとは違うかな？  
 —とも思います。  
 —そうですね。それでも、会報に載せる写真の選択には苦労させられていますよ(笑)。  
 寿玉—それはどうも申し訳ありません(笑)。ですが、他人が「良い」という写真と自分が好む写真とは違うことが多いのです。写真としては「良い」物であっても、自分では踊り物としての形が綺麗じゃないと嫌…みたいな。  
 —確かに、踊り手の目と写真家の目は違うかもしれませぬ。写真は、単なる時の流れのひとつかけらの記録というものではないですね。  
 切り取り方に写真家の感性があるわけですよ。  
 寿玉—そうなのです。同じ踊りの同じ場面を写したはずでも、写す人によってまったく違うのです。時々、撮っていただけで写真から、自分の中にあるものなのに、言葉にもならず、自分が気がつかないでいたものを見



せつけられることがあります。  
 —写真家の感性が踊りを通して趙寿玉個人を越えた何かを切り取ったような？  
 寿玉—そうですね。そういう意味で忘れられない写真が、一枚あります。森直美さんという、当時学校の教師をなさっていた男の方が撮ってくださった写真で、私が僧舞を踊っている写真です。私が韓国から帰って来てすぐの頃、「現か

ら彼方へ(1998年7月)」という芸術劇場小ホールでの公演のチラシに使った写真です。私は、綺麗な表情だからチラシにと思ったのですが、ある親友に見せたら「これはきついな。怖いな」といわれて。  
 —どんな表情なのですか？  
 寿玉—ぱっと見たときは、微笑を浮かべている写真なんです。にっこりではなくて、なんていったらいいのでしょうか、

仏像のような。  
 —「アルカイック・スマイル」ですか？  
 寿玉—あつそう言うの？ その写真をチラシに使いましたので、いろいろなところ、いろいろな時刻に、いろいろな角度や照明の具合の下で目にするのです。ところが、あるとき、その顔が、まるで般若のように怖い。まるで自分ではないような、蛇のような、恐ろしく怖い顔に。そしてあるときは、まるでこの世のものとは思えないような、私がこんな顔をするのだからと思うような優しい表情に見えるのです。ある時

には考え事をしていているようでもあり、たまらなく可愛らしかったり…何なんでしょうね？ 何十回見ても変わるんです。  
 —…。  
 寿玉—踊っている瞬間に体の隅々に水がしみこむというか、照明や音楽や周りの一切の景色を含めて気配を感じるときがあります。自分の上で何か宇宙的なものが開いて、普遍的で変わることのない何かに満たされて、その中で踊っているような。それを見たり感じたりしてくれる人の撮った下さった写真には、自分とのつながり、響きあいというようなものを感じます。

**趙寿玉写真集**  
 好評発売中

1,800円 22cm×21cm  
 モノクローム 30頁

ご注文はこちらまで  
[chumpan@dol.hi-ho.ne.jp](mailto:chumpan@dol.hi-ho.ne.jp)  
 TEL 050-5525-9669



# みんなに「福」をあげられるような コンサートをやりたいね

パク  
クン  
ジョン  
根 鐘

開口一番、「面白く書いて下さいよう。素面じや言葉が出てこないなあ。これ(インタビュ)って、なんかの取調べみたいじゃないですか(笑)」

いつもながら、相手を和ませて下さる朴根鐘さんです。

なぜ演奏家になろうと思ったのですか？  
子供のころはそんなこと、ぜんぜん考えていなかったです。スポーツが好きな普通の男の子で、中学でバスケット、高校でラグビーをしたいなあと思っていた。だけど中学のときにひざを痛めてブラブラしていたら、怖い先輩に呼び出されて「お前、楽器をやれ」って言われたんです。



高校時代にいい先生に出会って、音楽も好きになりました。でも自分では、一人で何かに打ち込めるような宮大工や彫刻家のような仕事があった。高校を卒業し



音楽なんてやるつもりはなかったので、延ばし延ばしにしていると、会う度に脅される。悩んでいたところ、ちょっと優しい先輩に「ずっとやれなんて言わない。三日でいいから。三日やってそれから止めたらいいじゃないか」と言われて始めたのがきっかけ。「そうかあ、三日でいいのかあ」って(笑)。

なぜテグム(大琴)だったのでしょうか？  
きっかけがそんなんだったから、「なぜ」も何もないですよ。楽器の名前も良く分かんなくて、どうせ三日で止めるんだから「じゃ、その大きい笛をなんてね」(笑)。

高校時代にいい先生に出会って、音楽も好きになりました。でも自分では、一人で何かに打ち込めるような宮大工や彫刻家のような仕事があった。高校を卒業し

続けるかと思ったとき、それでも音楽やってる。楽器をいじっていられることが幸せだった。やっていた良かったと思った時はどんなときでしょうか？  
お客様の反応。もちろんそれは、こちらが期待したことでなくて良い。毎回違う、その時によって感じる「気」の高さ、低さのようなもの、そんなものを持ち帰って下さったことを、後で、人づてに耳にしたとき、よかつたなあって思う。  
寿玉さんとの競演の感想を聞かせて下さい。  
ヌナ(ねえさん)は、こんな俺を使い続けてくれた。日本という材料の無い所で、十人十色、それぞれの良い所がある人たちの中で、「自分がやりたくて」というよりも「やらされて」次から次へと、追われるような、でも決して嫌いではないプレッシャーの中でチャレンジを与えてくれた。

今後の抱負を聞かせて下さい。  
コンサートをしたいですね。これまでも、芝居の演奏や、映画、コラボのようなコンサートをしてきました。いろいろなことをしてきた分、人より引き出しが多いかもしれない。韓国音楽についていえば、文化財が伝統だとすれば、民族音楽の伝統は100年と経ってはいません。伝統にとらわれず、ほかの伝統から学べるようなお互いが主張しながら交流をしていけるような外国の音楽との出会いもしていきたい。  
ジャンルを問わず、第一級の方々に芸がある。そういう人に出会うとダブルとしての「血がたぎる」のです。  
最近ではシャーマンとの仕事もしていますが、そこから舞台芸術について学ぶことも多いです。才能にあふれている人たちはたくさんいました。でも、音楽の出来る環境にある人は少ない。音楽をさせてもらえる自分はその人たちのためにも貪欲でありたい。みんなに「福」をあげられるようなコンサートをやりたいね。  
あと、身近なところでやりたいのは、生徒たちと、海に合宿に行ったり竹取り(注)に行くことかな。この間、海の合宿で蛸を捕まえたときは、結婚して初めて褒められたからなあ(笑)。  
(聞き手・西方恭子)

(注)「竹取り」…朴根鐘さんは自分で切った竹で楽器の製作もします。



# 「おさらい会を振り返って」

朴<sup>パク</sup> 信<sup>シン</sup> 江<sup>ガン</sup>

今年のおさらい会は、例年

にない会であったと思います。まず、出演者が過去最多の22名。演目数も最多の14演目（プログラムより少ないですが、当日体調を崩して参加できない人もいました。残念です）。そして、おさらい会では初めての演目も多数ありました。踊り始めてまだ日が浅い人、もう何年も踊り続けている人、それぞれの人が、この日精一杯踊られた事と思います。

今年私にとって大きな課題

となったのは、数年振りに踊るソロ、しかもソゴチュム<sup>ソゴチュム</sup>という事です。いままで長く踊ってきた立舞<sup>立舞</sup>やサルブリ舞<sup>サルブリ舞</sup>とは全く異なる、農楽系の踊りです。先生から「見ている人がうきうきして、踊り出したらなくなるように踊りなさい」と注意を受けた時は、「無理難題」という言葉が胸をよぎった程です。でも、どうしてもソゴチュムに苦手意識がある私は、

だと心を決めました。

場所を借り、ある時は一人で、ある時は「順番を覚えたいから」と来て下さった橋本幸子さんと二人で、何度も練習しました。でも、うまく踊れる時とそうでない時と波があり、不安を拭い切れないまま、おさらい会の当日を迎えました。私は寿玉先生が公演で音楽を録音テープではなく、生演奏にこだわられる訳がわかりました。テープの音楽に重ね

客様が手拍子をして下さっていました。私は驚きつつも、その温かい手拍子とチュムパンの伴奏に励まされ、

最後まで踊り切る事ができました。踊り終えた後、お幸さんが「今までで一番良かったよ」と手をぎゅっと握ってくれた時は、本当に嬉しくて涙が出そうになりました。

私が踊りを習い始めた頃、先生が「踊りにはその踊る人の全部が見える。裸を見られるより恥ずかしい事かもしれない」とおっしゃった事がありました。その時から、私にとって踊る事は修行と同じ意味になりました。自分がどんな踊りを踊るのか。どんな心根の人なのか。「石の上にも3年」という言葉があるけれど、5年後、10年後の自分を見ようと思いました。

て和仙<sup>フンセン</sup>さんが打ってくれるチュムパンの音が、とても私を励まし落着かせてくれるのです。一人黙々と練習していた時とは比べられない程、のびのび踊る事ができました。気が付くと、お

おさらい会を何度も経験する中で、自分の努力が踊りという形になって表れる、見に来て下さった方々が、それを自分に教えてくれる。踊り続けて良かったと何度も思いました。



そして今年。踊りは自分一人で踊るのではないと再確認しました。踊り手を励ます伴奏、暖かい声援、それが踊る人を勇気付け、その人の一番の踊りを踊らせてくれるのだと知りました。

まだまだ素人の手習いではあるけれど、そんな経験をさせてもらえた、貴重なおさらい会になりました。ありがとうございました。

〔注1〕

「ソゴチュム」…「ソゴ」は漢字で書くと「小鼓」。「チュム」は「踊り」の謂い。

〔注2〕

「立舞」…「舞」という漢字の読みは「ム」です。「チュム」というのは韓国語の固有語なので漢字はありません。立舞は正しくは「イムム」と読みますが、慣例的に「イプチュム」と言ったりします。ここでは立舞とルビを振りましたが、厳密には間違いです。



# 韓国舞踊との関わり

関口 竹子

一昨日のおさらい会は転ばなくて良かったです。むかし、以前習っていた先生のイベントに参加させていただいた時に転んでしまったことがあるんです。おさらい会では、他の教室の方と一緒にでしたが、これも良い刺激になりますね。リハーサルの時に寿玉先生が厳しい面をお見せになったのですが、私はそれを見ていて先生の真剣さを感じました。ずっと以前は、太極拳みたいな健康体操をしていました。

それが今から十年ほど前、子どもたちが巣立つ頃に、突然主人から「華やかな物をしてみたらどうだ?」と言われて「華やかな物をしてもいいんだ」と思いつきました。それからしばらくの間は、何の踊りを習おうかと色んな踊りに気を配っていました。私は「裸足にならない。肌を見せない」という事を決めていたのと、ソウル五輪の際に、観光でイベントをみていたことから韓国舞踊にしました。

当時は今よりももっと、先生や教室の情報も少なかったので韓国大使館に直接問い合わせをしました。そこで韓国文化院を紹介されたので、崔芳子<sup>チェバンジャ</sup>先生が教えていらした教室に入りました。初めての日に崔先生から「あなたは韓国人?」と尋ねられたので「いいえ」と答えました。そうしたら「ハーフ?」。これにも「いいえ」。最後には「全部日本人ですか?」と聞かれたので「はい」と(笑)。当時はそれぐらい、韓国に関わりの無い人が韓国舞踊をするのが、珍しい時代でした。崔先生が5年ほど前に本国に帰国されたので、舞踊は中断していました。その後、今も一緒にさせていただいている朴さんが、新しい先生を探してこれ、声をかけていただいたので、再開することにしました。それが趙寿玉先生の教室だったのです。

今後の目標としては、まずは踊りを覚えること。そして正しい動きが出来るようになることです。それが出来れば、健康にも繋がると思っています。(聞き手・箱崎麻奈美)



## ◎活動報告

◎ 2006年10月1日(日)

東京・代々木病院「健康まつり」にて、生徒たちが舞踊で出演し、模擬店に参加

杖鼓舞(チャンゴチュム)と扇舞(プチェチュム)をアンコールにお応えして二度踊りました。模擬店の方も盛況で出店したグループの中で一番の売り上げでした

◎ 2006年10月29日(日)

銀座 Summi-mi 高松にて、山口県立長府高校同窓会・姫松会に参加。太平舞(テレビオンム)、サルプリ舞を披露

◎ 2006年11月3日(金・祝)

「追悼宋和映先生 公演DVD鑑賞会」を榎町地域センターにて開催

◎ 2006年11月14日(水)～21日(水)

うた芝居「さんねん峠」うるま市、沖縄市、嘉手納町の小学校計6校と、沖縄県うるま市民芸術劇場燈ホールにて、杖鼓舞(チャンゴチュム)、三面太鼓のほか、お芝居の伴奏として杖鼓を演奏

◎ 2006年12月16日(土)

チュムパンの会 おさらい会  
若松地域センター3階ホールにて、チュムパンの会の生徒一同は、家族の方やお友達の前で日頃の練習の成果を披露しました

◎ 2007年1月14日(日)、28日(日)、2月11日(日)、12日(月・祝)

散調舞のワークショップを駒込のスタジオオストライブにて開催中  
問い合わせ・林鮮玉090-1808-8706